

59)

上腹部不定愁訴患者にみる六君子湯の抗うつ 効果の検討

1)九州大学医学部心療内科 2)国立南福岡病院内科

○岡 孝和¹⁾ 中川哲也¹⁾ 松浦達雄²⁾

目的：上腹部の不定愁訴を主訴とするものの、それを説明し得るだけの器質的障害が認められない場合、身体症状が前面に現れるうつ病（仮面うつ病）であることが少なくない。

最近、六君子湯が、上腹部不定愁訴に有効であるとの報告が散見されるが、うつ状態と言う観点から論じた報告はみられない。そこで、上腹部不定愁訴患者において、六君子湯の抗うつ効果を検討した。

対象および方法：上腹部愁訴（心窩部痛、腹部膨満感等）を主訴とした患者で、胃内視鏡検査にて特記すべき所見が認められなかった15名に、六君子湯、ツムラエキス顆粒、1日量7.5 gを、原則として4週投与し、投与前後での(1)自覚症状の変化、(2)うつ状態の質問紙Self Rating Questionnaire for Depression、(3)うつ状態の内分泌学的パラメーターとして午前9時の血清コルチゾール値、を比較した。

結果：(1)偽アルドステロン症によると思われる浮腫、全身状態の悪化を1例に認めたが他14例では、自覚症状の改善をみた。(2)SRQDは全般的に低値となった。(3)コルチゾールの高値を示した者は少なかったが、高値の者は低下する傾向がみられた。

考察および結論：上腹部不定愁訴を訴える患者の中には、軽い抑うつ状態と考えられる者が少なくなかった。また、本剤は、抗うつ作用を有することが示唆された。

多くの患者で、腹部症状のみならず全身状態の改善をみたが、その機序の1つとして抗うつ作用が関与していると考えられた。

副作用としては、抗コリン作用に基づくものは認められず、偽アルドステロン症に注意が必要と考えられた。